發執録

へ 13
1476

佛書し部五拾八 丑

へ遠13 門 論 巻 1.476
へ13
えへ14

夫以佛大悲の願輪に乗じて此閻浮提に應現しましまし應機の教法八萬四千に餘ると述ども其實は心の一字を説き聞きましましものなり故に千經萬論演じて一心を説と亦此一心を法界ともいふ此ゆへに古徳の云く法界とは我人現前一念の心といへりけん悟るを佛といひ此心に迷ふを衆生とも又凡夫とも以ふ此心に迷ふがゆへに三界を

感ず三界の中にも此娑婆世界を欲界と
号ることハ五欲に耽るが由へ也其五欲の中
にも婬欲食欲乃二欲ハ皆人別して愛貪
執着するが故に法華経にハ婬貪食貪
此故に欲界と名付ると宣へり去バ此欲
界に産れ来る人ハ高貴となく下賤となく
老若男女を論ぜず此二欲常にありて貪嫉
妬して是にしたがひ造る罪業無量

にして三途に堕することの疾き事雨乃ごとし
と仏乃おしへにあふ豈是を恐れ慎まざら
んや爰に此頃或人此執心両巻を写得し
来て予に告ていふ是ハ洛西傳阿上人
の校合して記し玉ふ当時ある侭の伝おしも
偽り錯らざる実録之類なる世に利益
ありて彫刻して施与させ給ふ助業ならん
んと予是を写き見るにいかにも懈怠をと

励しとなるに策り好標準たらんかく
恐るべきハ家の一心唯慎むべきハ我一心なり
けれバも鎌倉の後室のごときハ自ら家の一心を
思ひ諦め絶て又旧執将じがらしと云くる
ごとく月日死立て後ハいつとなく亦其執
嫉妬常となり終に恐しき姿と形を顕しけ
るハ後車の好き誡よ何とまや予が知る
所川寺なるに葬りし一ツ婦人故ありて其

後彼が墓を堀るが頭に角なくること鬼
神の如し予が先師彼が罪障消滅のため亦
其形を刻して多く此人に面向をなさし
るときかしめましすれバ嫉妬深き人ハ
面ハやさしく見ゆれども内心ハ夜叉羅刹女
のごとしと仏誡あ玉ふ苟もこれを念ハヾ
早く嗔恚を翻し唯一心に念仏して未
来を無快楽を願ひ玉ふべし是け婦女婆

世界ハ衆苦の府之妻子の無常を思へバ
今ハも幻泡露の命思ひがけなく死ニ臨くと
空をつかミ掌を打ち息吹て苦しむとも
誰か一人扶け救ふべき人なし此時ニ至りて
後悔すとも何の益かあらん何ぞさそ迷乱之
を常として百万年も生きながらへんと思ひ
をなし俗然として光陰を送るハ深き
顛倒にあらずや今や天下泰平の世の中ニ

ハ万劫ニも値ひがたき弥陀本願國中弥満せる
時節ニ生れ逢ひけ此生死を免れずハ亦いつ
の時をか期せんや若此書を見て信実ニ
厭欣心起る人一箇半箇も出来なバ予
が深く希ふ所なり依て今剞劂氏ニ命じ
開刻して有縁の人ニ施与し廣く世ニ
弘通せんとおもふのみと云爾

于時文化三丙寅中冬望日比丘了空
於蟠龍律寺誌

女人愛執録序

京師衛守宮元僧生時孝蔵の奇特哉
書たる秘艸案を愛執の報應哉記を閲
漢文を以て撰へ来て云浄業の以爲訂
正し玉へりしを余はらく是哉見るに
古今の珍事なれば其因果課の以爲り
圖偃をかえて白んずも徹まで一本を孝蔵
冥祥録と名けて彼僧方へ寄はしつ猶ハ

京師の書林澤田氏を請て版行しける
に都鄙の人田舎までもてはやし今
すでに八十余歳を経て擲書世にあるや
哀愁録八郎が評を新しく是に依て大
坂の書林河内屋正榮と云者めでしてこれを
なほびくに再三来て切にゆるしを与へ侍る
予ね漢文を俗筆に讀て況義理を
解する者少なれば此ゆへに在家の人の為
に拙き筆して和文字にて譯し男
是を讀人聖教の旨を知りて佛法を不思
議の利益をも思ひ遁ても止悪修善を
心ざし或は人にかたられ予が心ざしなり

元文四己未年仲秋望日

臨水軒西隠傳阿識

帝国図書館

女人愛執恠異録上

松之助女乃執心にて苦しむ事

京都或商家の子なり松之助とて十四歳になりき
容貌美童なりて生れつき色白く麗しく見る人目
絶はるばかりなく。さればそのあたり人がへつらひける
ありき。享保十四年酉の十一月五日より。おやしき病
悩をうけぬ。傍人はそくかの人のいふは。枕を人なく
彼の人の常に錢せ見たりけ。藝錢たんてうしろへひき
つるやうにみえて息もへぎなりし。むねいたん
方なし。母をやく身わかり父を人してそぞろく

明治四十年一月廿四日 中村健氏寄贈

りしが。此御經をみるに。何をさして事と説玉ふはなし
家内一族わざわきて。いき靈と物の怪としてぞ付き
らんとて。針薬灸治を施けし。神佛僧徒の祈
禱も力を碎きけれども。その験なければ。せんかた
もなくしてあきれはてて。看まもり居たりけり。智光
といへる僧文点請して偶其父と識る。亭主も
とうより知たる人なれば悦て請じければ。かの童子
が病状を見せしむ。その時病童が云これ澤ろ
象海乃二師に見えし事。我これもふ文殊の奇特
きらんとねがふ。公幸にふみたまへりしや

以上の二句童が言ふに非ず往きし例此にあるなり
知見即時香銭たき鎮ぐ理趣分を讀誦しけるに
經の半ばに至りて病童たちまち感泣して讀經も
ではありて童が云。經中にあるとて見ゆるはいかに
事にていやしく知見云凡夫賢人平等無高
下　此二句ハ某所ノ胎經ノ文ナリ　此佛性の事なり抑此佛性
は佛にありても増する事なく凡夫にありても
減ぜるなし。なれども悟れる者佛といひ迷へ
るを衆生といふなりとぞ示しければ病童唯然
りきゝて感涙ながしさて病苦をわすれけり

ぬ痴漢も辞して帰るまゝ家内も安堵なれども
ひきうし姑ゆゑ又病者あるゆへしれどもひく
僕、銭をせしかバ痴漢来りて理さ分銭を渡されハ病
悩又あんまりぬかくれぬるく病事わすれたびゐり
一日僕病者切して狂見施をんで家内など
ろきさりき沢るれば符銭を痴漢銭請して読
経せし処しバ病悩又静まりたれバおわれむまる
仏コ見へしら僕人の目よハ人まて病者が足銭
捉て万弁を縁へむけつけゑ手銭つんで
ふてまいゐ手あへりしが病事くるしむ事なる

くしその時痴漢病者が銭掴へ呪銭誦しけるが
ながら申されハ魔苦漸く止ぬ痴漢曰く女が眼
より見ゆり絶わりやと病者云足さわしんてきれ
ハゆるれてしくとかく苦しみける若さの女人の
務めて口へてかくらハ人へまでと痴漢云さしバ母
まありくちかれがなり冥福を願ふべし事
銭なやまする事なりれど病者しへのだらくいひけ
るが涙ますして亡が云いますはじめて二人の女
みさきさそんで座より銭見る事一人ハ遊冥の
人とこゆ親族の婢女がやが眼をてよりより今一人

ハ此衆の人とみゆる其時歌舞稽古しけるかきこえ
やわらかにやわらかなる声きこえてハ菩子
菩へんとして其の後ハ家人筆を取て言
にこたへけれバいかなる事を書て筆を持て摘筆
菩提ノ所爲ナリ　知闇得理を読バ病悩文静なれバ
時病事多海にてんへん事をねがハ父其時娘をよせ
て来迎を請て師丈也と持まいて来る父は禍の分
ちかられバ師病事の後に謝卯し且法要を
演しせ三昧を授けられしかバ病事悟て懐
愛しかりし人とまのあたり縁にみへしとぞ

傍人の耳にハきこゑざる事なりしとそ帝が
病悩夢も覚るまでに快復せられ十一月
サハりなく父のまなびハ父なり歌舞称賛し
きね知閣帝子にかくし病中の事を覚へたる限
ありかれど童が云はじめし禍ハ女のすがたにて
来ありて其事なびくなれども其形ちとハ見へず
一日忽ちあやしき女人をみる齢十七八ばかり白
き衲を着髪をみだし眼ハ血をそそぎたるがごとく
甚いかりたる気色にていかなる悪縁にやいつしか
此かくれ侍りし恐ろしき栄ありけれバうかがひ

二度三度かげきゆゑいへども君一言のかへしげ
なき御返事もなき故に遣方もなさ挨拶なさ
むねふさがり途法に暮り傍らハひとくすまんげ
なきゆくゑ山猫いつの世よりハ君きんまで聞つとめ
しかれもわれ律ゑみ流くなりもゐつて これハ一家得繪版学業が婢女のやさ
南月三日十七又して死せ 又偶一人の処女わずか十五六歳ばかり
かの人へて言る事を棄し来るの名残をいやをも
それハ蓋へしてられ君が君親見初まいらせし
有る相桃の情息びらして来きりとふられ向ふ
さてハ男傍りれまふ人にそ例かやとかれ蓋へて云

されハあらぞや聞つバ此の節より猶らん清水の和やか
ある其の家へ来きりしひそかふ私の人へ打しと文ーろ
しひおこせ給ふし人あや包へバまずて傍る仮り堅で
もコゞ名を残しむ玉ふ事なれどふ吉し日か覚さり
されし名残ををれし時気色んをまれバかれ手て銭
のくわが口銭ゆひ紙よかんをせしかバかき筆銭尊
ひく捨つられつれく眠らんかすれバ妖女コゞ記と
尊ひく同宅ませんて罵しおその時処女ありく云ふ
られ白弟と俗花の文有銭なきんされまふ何そ媼が
傍るませんやも二女れぐひす何らけ明きたいを銭とを

お擧けりき恐怖しきまゝいろん方なりしこれ等後
も妖女ハ浮吏もいづの傍をたるゝなり如女ハ時く来
まりき㒵字まて般若が讃みける二女をもて頗
る種絹せる妍る人へぬ妖女がたゝ正妻慈悲のこゝろ
まで深妬乃般若がとみたまふありしがれども漸
が業る事。はなりなし何為同じ般若かなきをし
讀人の心純に依て利益かくぞ見ゆるやと
感嘆しつゝ悦びぬ
前に真言師来て理趣分が讀誦操遣此心地の
みを任せて靈。童を迎して却てゐるぬ今

剛師ハ靈の惑妄をはらさせて得脱せしめんため乃
心地まで理趣分を讀誦にかくいふなりしん
まてわが法名を光白貞蓮といふ君知聞不忘く
いよく冥路を助けたまへその後ハ二女乃妬情氷
がふとくたけて迷川ましまさる姉妹異なれバ
妖女悦びくなはりけりきた怪を語るのゆへすぎ
来ハ女方が脱出べしとて如女が云深き般若が嫉妬理を
きゝ此まて女方を憐ぜん事かなうじやとて文
海師の彌經を唱三飯がつけ因愛欲過患三界
輪廻如旋火汲井輪等の勧化をなりんで感涙

せき給へとして処女が云ふやう今方に去へし菊三
十歳の頃なりしかバ婚姻の事なりけれ又菊が為に
邪ゝの事なりけれ此二事を女にかゞ喜ぶべしや
以て却て悩せれ妖女が云れ愛欲まよひて
多く我ら身ひとつ悲しむはおそろしきへども
此逆縁によりて深法の利益を蒙る事何の幸
か是に如んやて霞女が婚姻の期に成いへる事を
かき尚慈惜の情あまりかわ忘すしめくらがき
ろ名我書きてそれを引さまて門戸に打てお
付よ何の害かうらん永念供申て云べしとて此乃

方より喚すゝめ知観に云れ般若経読誦しておき
悦真如の名義我同じ事我記憶せりや童が云
畜生道に知りて妖女は西隣なるべしとて同廿方
又来福寺に詣して海師に謝し斎食我いとなみ
みて五十余僧を供養し妖女が追福に擬ぎ其
択童が夢に妖女来りて云れ法縁に愛じて
只今善所に生ずれ偏に君が賜なりと云て去る
是我みきバ死の私ちを駒白我気雲我みみ
向ひて飛行しぬ明ゆきバ享保十年かくれ戌の年
正月六日は択童妙まれりて居りてよ薦のお処

女来て云けるは殺義乃法味我聟し知識の教化
我慕ひ愛欲乃念ハ止がたきぞと久しく胸中に掛
結せしが病根おこりて再三なりてそれにて薬餌
も験なく先月廿三日に死おはりぬ葬礼も終り名残我に
心附残る処今申すなり生我うけし節は元来知恵ならぬ
生まれて高文殺義我読誦せし也冥福を修し給
ひきりしも貧に打聯てまりぬ弟子心持ねては
読しられてと年ぬきしめ筆をそへて未知ゆゑを
告ざりけるに廿一日六年乃刻げる小弟子志き
下りて振ひ弱く担弥薦を悪しき来つるし時のぬく

なれバ合家おどろき集りて看護し知恩へと使
我を招けれバ知恩文来りぬ是より後は弟子が言を不従ことく悪く畏の有様なり
弟子亭より向て云公ハ弟が父にて何しまするやそ
けりしなかりつる愛欲のおもふにて弟子我悩し待
ありけりはかるざり然般若経を読て二師乃
開化を蒙りて男女乃相我忘るき愛執の情解ぬ二
師へ此謝礼を述終りし時弟子八父を南にむけ
我呼師に告ね呼師弟に向て汝ぢ佛前に向て
礼相せよねてやされしかバ弟も欽て三拝して次に知
呼我相しぬ知恩云汝を父の為に拝みして読

八十八家に来る事しげくなりしが此時墨絵を父へ見せ
るや否や帝が云父の家より呼来るハ夢の覚るが如
く此家に来るを夢中におぼへし来るとかいへるとハ
覚へけりぞ説此家に来る時ハ父が家にて看病する
者の為に熱眠をせで足ばかりなりけるさて二師乃
はふや魚鉄を夢りて気挑ハ衆を月とも因男もて
よりりく前後を忘れて蔵の一日ばかり敷り
師と見て胡中へ入りしかもれども此の時
父母親属なげきかなしみ延喜の如き知る人来りて
弟ひその後男は引れて洗浴し桶にいれし

事ども一くされをみんなわきまへかくいへるを伝へよ有る
人もぐく叱ざるごめしを此時さて八郎郡して説
かしれをけるまするよ来を知られまより棺に入りて
葬出るとの送り行者帰りかへりしも其の僧侶乃
読経をなしまで住導師は棺前にて法語をとき
るすもち有経桶に火をかけたの焼し折子帰宿
して灰をよせ骨を拾ひしてハ其後を墳墓の地
まで僧衆は父が家にまじ読経回向の事に相合
を僧衆し施物をひく有結極く親朋集りて
読経をなしし百万遍の称名を修するほど親匝

一に是を見させし意趣なりかくるゆゑ國師答て云く
問　棺槨を備ふる時霊魂西方へ達するや否や云
棺槨勝善淨縁なきバ受生不出生するげバ導師
の心行貞實にて作法如法なれバ回向も棺槨を達
せさる事なし　但倉卒ハ其期紙合せるなりと
師問　十方より法界乃衆を以て集る僧俗群法界
の為にする廻向ハ迷冥へ達するや業苦をまぬがれ玄
に縁有精霊ハ四向も棺槨も悉く達して縁なき
ハ請るに由なしされ法界霊名をさして怒らしての
るハまんするハ請るなり問　僧法の中に一棺

水一摶食器にもりて常日より法界万霊へ
供ずる人ハ施主までゆるや否悉く請中ぞ
乃者平日湯なくもしむかわり如法にして祭る
ともおもかはらずとも絶食も如法ならざれバ多味多
合にても請る事なし　問　中有ふも施食も
アや否常に施て施餓いふ事なし　問
中有に急なりや否を採いふこころなし
者にわかるゝたるものゝ問　中有にて其人なおのみを
所に居るや否ごうち中に居て但時なく此堂
子の家とひゞう父の家になる事なるハ富世の因縁

ならぬゆへなり○中有ハ東西乃方角なりや答
て臆病なる中なれバ方角弁ある事なし○同
清水寺誓願寺等れ佛ふ縁ある事なりや
答方角あろふ事なし何ぞいづちへ詣る
事あらんや○同世父母兄弟あるや答父母なき
者ハ人にて有る事なり齢ハ十七才から衰
老病にてハいひなぐり一念乃まよひにて身命
残らしなひ父母よなけき銭かきとし事悔ても捨
鐘ハ何乃同世ある緒が子霊なる人の詣もる
拇指よ入と云ハ嘘なりや答銭ハ毛孔より出る口

中等よりも入何で拇指に限らんやと國師教
給ひしまに安普和唱して流がうぶいとし
地獄変験記乃久能山
の僧乃死後に大に因し尊が云常市ちよ姓名ハめると
僧人答て水田丈助と尊が云願くハ常来らしめ
よし呂母宗人行てかくと云ならバ市長ありく
来まらと尊丈助に向て云舊免ハ尊に死せるも
の八銭なら施す銭人あるとして東家に娘ありと
云ハ人盡なら願くハ君がまへばちとくく人あり
得りきくせて東家の娘乃恥銭雪兄得りるべし
やと市長ゑもしてゆる也同舊免ハ世なる丸玄

にいたりて姻期をいりしハ何ゆへぞ若それ粧飾
の縁談を推しれまく今にいたり何ぞきんかんや
されバ本銭わたしめよと熟銭せる時に我離去
べしと時に知可て看侍の老と本銭相して森
しむ望野居の刻に欠伸して見るより知可が枕
の後なる銭四つ久姫女きよらし筆ハ出て見へぬ
きちがと云爺八あれ知る事なりし知可佛前
小香大銭備へ讀誦回向して且加藤が銭靈に
授けしに此八是三世諸佛鎔貌悼桐の夜なり今わ
き世の授与をさ蔓持して佛果にいたらんと

授べしと此枕本を又鏡挑して眠りを覚さ
に見て知可に語て云ふき何ぞ室中に銭みえ
バ貞蓮妙林れ二女尼の形ちかなく七條衣銭の
けりが母なも共に室中に降下しに母も尼
の形ち少く孫と縁衣銭くけるり我に向て云二女乃
余波にや剃に及ぶ法意銭葛る事実は御存
なりとされ回母いるも雑貌しれまつじやと母の云
今此が見及ぶでいのぶとくそて何ち若しこくあらん
やされども追従の善根銭修をべしと其時二尼同
ぢうに云らわ何の幸で共に女身を脱して善

赤乃生涯まで忘まじ偽ら君が賜なり一言ハ
謝辞を述んが為なりとて先妣を傳ひ来る
なりと云て三尼をも自害させて己も
去ほどに夢さめ覚りを語る誠に前悪後善
古今希なる一件の事なり親見聞せし人を
聞て粗梗槩を記する而已

松が助が父の名も清徳の町も怪まれ侍れどもまぎ
ところは浅しの処女は孫にも付べき年比の女のいまだ
嫁せざるはなし妖女といへやしき邪見の者はあらね
まいふゆるれいのあるかわ

夫人間ハ鉄虫蛆木までも生るまで生きしいけるものゝ因
果あれ欲深淫の因縁より出生せるゆへ生みらん
愛執の念はうらきとしいつなるれども今の二女がおとゝ生
霊邪見一人を愛執して同じ家に現じ来りて云
是ふてはさらひまてそて相対しる古今あるまじの
奇怪なる慥なる二女が心地をかへて悪業を消せバ
現身ありきへ佛をねえせん事をもかゝるべくんバ
順ハ浄土へ往生せん事も安かるべきまゝ
主心ハ我妄愛執のかくへ男ひし事かなる
ひとくも余りあるめて現世一旦の愛迷生まてハ

なく悪業のゆゑに来るべしされバ恩愛の法
に依り流るゝハ凡欲の念縁を断ち女身残余
へ生ずる事実に仏法不思議の威力なり後に
悔てを前を考ふれバ悪縁却て善縁にも立つ
遁し二女の怨執せる事今現在して成仏せ
るや目前の鬼土の形見えてしも勢せるや文言
悔て生家の名に残しるバ能く一筆に聞きぬる
てきれゆへ二女いのち残しるも父母よりかねしひ
証かけし科いんきせん人皆知れ一生ハ夢の如の露
なれバ王侯大人の富貴も夢中の栄花なり

おとく百年の齢を保つとも是夢のごとし況や高
家下民境界何ぞ是しもまたりんやく粉髪
塗衣の外ともかくも偖るに佛法修行あらゆる
き事なり其後いづれの宗門を尋ぬるハ恵ある
を底下凡夫なれバ大悟得脱せん事もかなふべ
しれども三大部の経典を書写して讀誦せん微生の
に累劫浄土へ生ずるの事もおなじ得ん人ぞ
上代當果感じて八一旦ハ様の言の如き
逆まで退没輪廻のかるしひあるを唯願くハ浮
如来の本願をよく頼み助け給へと称して

名号を唱ふる人ハ其往生の縁りとなりて来迎にあづかる
終り極楽浄土へ往生せん事何やすき事なり
極楽ハ諸仏菩薩なり土の地の感じて日くに成仏
増長しておもて退転の事なく世尊に功徳を紙
浄土に通り生の者とすわ十地の縁りも早く成就し
現在の父母兄弟妻子友の二女並びに生く世々の親属
まで仏の恵みによりても極楽世界へ往生せん事
心の儘なる事経釈に明かなり誠に有難き利益
なり
女人愛執深録上之巻終

女人愛執怪異録下
死霊人哉こゝろせし事
近年江戸の近国にあやしき事あり其頃七
十と云へる者あり武士六人の家と年久敷む
つましく語り合けり其七八歳の男子ありお
きバ六人の家へ参りて安き事兄弟分をも
なりて六人の家ハ商売の事にて他所へも行て此
月廿日も逗留せる事ありて他所の縁もとも此
七八日目の日やらん隣やうに毎日売行きり或時
六人の家他所にて病気指れこりやうく出て家へ

ゆゑ又あるもさ倒し吉生すれどもその騒なくつ
おそり命終したり伝七元来慈悲なる氣分にて
かけく弟年残元将軍進つし後家よんをを付
て永遊の後のまでも言ませたりさて程ちより
八日目ま伝七までの叔にて約領持たる亦へ被六
女房左の装束にて金脇指銭ぬき持ちて伝七
銭ホしんぐ云けるハさき方銭負実名おけるんけるゆへ
心銭ゆるしけるまで他へ行けるにて口をつまる
せる不義をなせし弟年来の弟なれども存生の
肉八おもきまさり紀郎して八業通いのるゆへく八

しをも討つとわかつ侍敵を与へし恨み忘ひおてせん
とて切かかりけるゆへ伝七肝魂もうせおきどぬき
合さて切むすびけり下人が眼まで六る衆八らんへぞ
許うも叶へぬゆへ主人が氣重志かつんかなれもひけ
まきおきぬき分まで乱ざりたれる叔を右かし脇へも
より切ぞさて手付程なく六名衆浴せけるゆへ
伝七大分をつかく体みたる所よ又六名衆来く
切られんゆるとて抜合せぬまき八文六女房が
ち銭みつしるひ志らく体まんてそれバ又六名房
きて切らんかそうまでもる年六七る抜兵の後なれ

ハ源七眠る事もならずぞ朝夕の飯も喉へ入かねる
漸くよはれとて八日めにハやせ〳〵と姉
ばかりにて立居もかなはざりき下人共や
与吉もかけ付人ゞも見舞もせず下人まで経読
も醫師をまねき心よき方へ行けど
て告しらせければ驚き来る心得ハめずらしと
云ければ源七そうし人がら出来云けるハ六合湯
独楽をつかまつりて其の類を云て医者を
も切りける四人何がし云べきいと悔なしとの事なれ
まく文字をもて言残ふんぞ遠ざかりけれ

すて余人の目にハ六三郎ハ見へざりき扨伝七ハ浪宅
くはゝれて九日めにあくまで顔に現れて便と
をたて浮しまといふべきやうハなかりき扨六三郎
その日よりどうか家人離れ出て浅ましい行く小
力ないやうなる物して我子ども持たせずにまして
後家が目にハ見へて痛いなれど一ちやんなかしれめさ
さうんで逢んとなれバ急く引きせし念をさせ
をせあげけり下女あきれてを行く見たまゝやうし
ひりれバ二日三日の内を養ふ後もなくなくてさ
りひるが耳めにつひし時六三郎どの来りてか

やうやく浮かべて涙うかめきたりけり下女かなしびて
ありしまゝに見えしまゝに知らし其の目にハ六三郎と
見へずて何して後ハ何も見へず後家が家の内
出ありしと面影浮びて口ぐちに告げるまゝ
ずへりし昼夜の夢に併まる縁のみ知る合ひ給べる事も
なかりければ段々に病まさりて五六日ありて目を
見出しうめ給ひ給ひ終りぬ
是れハ今年廿一歳ニぞなりけり国元も召
も聞かぎる事なれどもそれ故その縁
も有ゆくに続ききくりしくハ筆付ほしくて目

前まで源七が獨樂を揺々しもの内をとおざき
心ぐるしく佛を直まへにくらし人の行をしゆく
あさましき事なり後家も源七を捨く
れそろしき咎うあひ新義なる事さいゝぞせ
し事に縁のあるまで佛しぞや現世もかくのご
そくなれハ一期済をむしての地獄に落たるゝもいか
なるせめに逢ひて六道に巡たん断せらるげらぎ
これ男子も女人もかやうの事は見ぬことに付て
をおくの身持を大事に慎むべきあるなる
ふかゝるをせる然る人が見れてそれぞ

むさとハおもしろぞなふ聞じき事なりけらつぞそハせ
責にあふべき後家源七りそまうべし佛も在家
のあり一夫一妻を許し給ふハ男子ハ一人の妻
あるに其外の女人にあらぬを通ずべからず女
人ハ二夫にまみえず貞女の男子あるハ方
をもとねぞあるべきなり色欲さかんにしてふ
埒なき人ハ此世にても一家にも他人にもそしられ
家をもそこなふぞ身よりも不行儀何方角に付く
あしき事ばかりなれ死してハかならず地獄
にあり幾千万劫が間苦るしきせめ人にあふ

やさしき血の涙をながして後悔すとも甲斐
あらじ今までふ埒せし人をまぎらさる事
を是非なしかやうの事に及んで後ハか
ならず大事にいたしむべし今までせし
ふ埒の罪をほろぼさんがためなるべきかの
善根をなし誦経称名こゝろわれもむく
方丈鈴鐘念じしたも絶えて仏の御慈悲
就寺ありて滅罪のはかるゝ事就かるべ
き事なり

嫉妬愛欲の心ふかき女指蛇と化し額に
角生ずる事

元久二年の比鎌倉に三十歳計の後家十六
歳ばかりなる娘を一人もちけり家来何某と云し
聟をとり男子に愛着し若何とその家来乃内に殿
目ある者の娘十歳の比より身をかしひくゝそめて
たるあまは成長するに随ひて眉目かたち美
しくなれバ三界若るれバ後家も痛がり不便がりさ
幼年より閨ちかく寝所させらるゝ人廿歳まで
れバ子を是愛しく傍(そば)はなれず召使いはりてぞれ

しかるを後家と彼若き男と密通出来一年も過ぎれ
ば娘もこれをさとりさんざんに腹立して離縁をこひそく
かの浮気もの継子なれバ或時後家はやく此男にむすめ
成長せる娘ありながら若き男をいだきせ
し事さへくちをしきなり此後ハ如何にしてか
れかひきりぬべしさて彼男ハ元来筋目正敷
者にて此家の勝手も知りぬれバ向後ハ娘と夫婦よ
して家の跡をつがせけり男ハ隠居して心静に後世
の勤めなすべし如何(?)頓じ擬(?)免さて娘も若き男
となりてそ(?)後家の跡を継かせたり若き男と娘

と母が兼てより其の継子知らんとする事の事なれバ継
くも辞退すれども母家督なりとて付けれバ主人
もなりけるとにもかくにも情けなしひとりの事ならゆへ
母もよろこび吉日をえらひて婚礼をなして老人
親子ともども其の男ハ屋敷のかたへ引越して別家を立
させり引籠てこころやすく後世のたとへんげのり
して暮しければ夫婦の孝行なれバひなく日を送り
幾度も見舞て馳走しけりかくして一月程も過ぎ
てある時夫婦もろともいはずぬ隠居の家に見舞
てきやくとして立出しけるハ年去るハ遠ければで

も着物とかぶりてぬりぜもくや鈍綴の時分よ
ていへバ手がもなされよかしめ身達しせれましい
やせ横縁をうじへどもそきもいやそ何かよ
かぶりたる物我ぬがせ丈婦もま嗜毒か重何す
まそをは義かよいしぬるすもやはいふる半まそを
まれくりはしませぬすべきるすなりとく口説
すそし隠かるしひやりれバその時母やりる八今
ま何をとりかくしやすべき有倫よいひきらさん
その身な造がさ隔く禅逼せし我せひていひくま
婦よ世しも我そろとるを起こりそのるすなり家

我ゆだつそそれへし出て十日せる我かじハきり
そて八字縁もはすれさらてろやもくらしぬるが
ひぶろよ色てて八日く擽くま淋しく鳴る付
てハるう法まそでハかやうそてらそ
趣方をれかひ出し宗思んやとされそるるまれ
ぞ色ま付角よつきてんぞおしくぬるさ隔し
く分く鋒手じても目をあハごろし挟の角分
手ゐ法りひ髪我挿るで久れバ顔口かみの中に
手ぬさつる袖あるま何やしんや鏡まうは見れ
バ苹のぶそ成角ぁむそくりこりそもかるしや

やくなきれとてけりよ指の先もつねに遠ひさるや
うたがひしゆへ能く見れバ十れ指の先ちぢひ
くろみるは蛇のかしらのごとくなれその方なまり見せ
気しきもなしとへげりなれども角やかれば
またきかくのべきつかゝどもなき見ゑ袂へかくてかく
ぶつまたる袖をぬぎられバ彼より角ふきりたへは
八耳ぬきハれで切てそさゆじき筆道場る
の所よ脇より十の指ちんハまでくれ蛇とかて右
銭びろくかぐおしけりま婦れ共わたら月をとらん
くれそろしさるしき角りぶべ死やうもな

きとなかりとふ證分なくてま嫁に不動記をも切
お知らる知識我講じ出家の身となりり母
も此仲をきんでせり剃髪浄衣しての後ハ
尊宅ちを寺やし三人一所り昼夜念仏れて
たゝざりれバ一二月の内り母が角をとれ
くなくるり十れ指先も落のごとくまわり
れバ三人ともま悦びつゝみり我念仏れてるる
ざりれバお菀の後ハわすられども惜娘ふ
ハふしぎなる事でも我歳じ月を友けす紙
遂し事ちき仏死きるんへきり

一切(いつさい)の女人(によにん)すべてかやうの事ばかりにて鬼子(きし)母(も)
くハかならずしも人々を悩(なやま)しあふ
べし愛欲(あいよく)のこゝろさかんなる時(とき)ハ面(めん)く
れゆび先(さき)蛇(へび)の形(かたち)しらするぬりん心(こころ)つけ
てみるべし嫉妬(しつと)のこゝろ起(おこ)しき舌(せん)は
ひるなる角(つの)ハとくぬやや生(はえ)かくさぐつまへ
きるすなり爲(ため)へとくさそすでハおしき
事をそろ(?)年(?)それハ悪(あし)き事ハ恥(はぢ)そて
も名(な)なしかるくずしも此(この)後(のち)ハ心(こころ)でこゝろ
付(つけ)いましえて分(ぶん)おるすみ付(つけ)て悟(さと)しむべし

角(つの)も人(ひ)也(かい)にみへねハかゝるはしき事なれ共(ども)
夢(ゆめ)ぬる(あさ)の今生(こんじやう)ハそれ程(ほど)もかくもとて後(のち)く
生(いき)ても死(し)して地獄(ぢごく)に堕(だ)して幾(いく)万年(まんねん)
れ苦(あるじ)の湯火(とうくハ)の責(せめ)にあひいくばくかの苦(くる)し
みをうけんなれバ恐(おそろ)しくかなしき事ふ
ハ信(しん)ずべしや是(これ)に付(つけ)てもとく随分(ずいぶん)心(こころ)をやハらか
にする慈(じ)悲(ひ)心(しん)を持(もち)一心(いつしん)に観音(くわんおん)を念(ねん)じ
善根(ぜんごん)をなし物(もの)を惜(おし)むの心(こころ)をそうしの勤(つとめ)
方(かた)ハひげみ仏(ほとけ)の御(かん)慈悲(じひ)にて今(いま)まで(?)の
罪科(つみとが)ハ消(きえ)ゆるしたまへ此(この)やうに願(ねがひ)申(まう)し

小八目おがみ浄土へ生ぜし給へと願
常かりんごろうす経みをまもるべし人身まづが
たく佛おおひぐしかるべしとく後世の
覚悟あれてこ所事なりけるき

道宣律師之浄心戒勧云女人之十悪

一ニ貪婬無厭

女人の婬欲をわかふ事海乃
一切の大河小河の流をうく百年にあまよ
ましかとるこゑとこつわらは飽ことなく
かくまするあきこるすなしとえ月男満てん

みるべしこの身万人でも、いづれとも交
合あるにもかかはらず一夜の情にも婬欲あつて
すべし事なり

二ツ 嫉心如火

かるひにも女人ハいかさバ恨怨を口
かたち親切なれどもひとたび心の中ニかくし
からざるの怨をなすは祟ハうらみのまとひなし
女人わるきハ悪ハ咒咀し毒をも飲まく
これかひ他を殺して其身をも亡一
人をそしらきたしれぬなかにも

三ツ 疎親含笑

今まで遠時ハ未物いてたるき

おもはずにハひとを予くみ妬気ふかきにひと
あらぬなさけ見限に他の男とも逢ひて八夫の
捨れせん事我れかひ悪ハやく殺せずに
しかも殺ふなかれ

四ツ 放逸無慚

うはうしき言うらおをほしいまま
かんざしけしやうなとの錦をねだり衣
其妻をそしり候事他の
心をむかひ嫉妬強くして他の縁
まことの事なく後世ハ悪道に入事我れそ
ある事なし

五に口多悪業　万事に付く虚言おほく言ひかはし
へは夫の縁も絶ゆべし　言向えぞんざ
そうわしく親るゐ兄弟の中も縁を云
は母姉妹たがひにさけて仲事なし他
のそしりを引く事是みな口の悪業なり

六に厭背夫主　おつと貌よき男子ありて八
となりも恋慕におもうれて何ともして夫と
あいし事つれづれひ歎やうなきことすぐ
きるのみか夫捨をみなぞかきて八病ひを
なりさそかり偽りまとしく思ひなきて

夫の家の銭宝をかくしくと望みかし
てはかりしそむよくば夫銭ころして偽
まうけべき術のみ銭をもとめけり

七に心多諂曲　女人のくせとして偏なる心わかく
思ひぬ事をもあなどりいひ根性かゞみて
ゆへにまぶしく悪心ぶかくとも心は千里
れかなる偏なる心の構へねばよき人をも
おしへひとえに人と中たがひはなるも大

八に貪賤忘恩
かゝ妻の恩なし忘るゝ　父母は深き恩をばあるもの

べからしやうく小ばかりにてもまろ財分
小さき世帯の邪にて縁例の相続ハのりて
きりよ付てをも女房を招入まろらざりし父母ハ恩
又妾きんなりしまて夫の家へ行てハまげら
ありまくしきて父母の恩ハおわりられや
の物を貪りてまの夫の家へ持運ぶよ父母れが
くれる時ハよろこびおき時ハうらむ父母
身上かろへて親類の気をもやそわ
愚痴者をつぬぎてあてふる人家心づかひなし

九 欲火焼心

色欲の為ゆゑ父母をもえらび只

を切るべき事をもわすれていまだ縁
姻をむすばずして孕みて父母に恥をあたへ親も
あまりつゞの様よ入たれバ筋目よ相応の男て
をかいのちもく欠落あるもいつて嫁して
後けりさらき夫早世すれバ独もわ
ぬり又嫁し家事けりのまわもひ夫を男
女の子をも家督を持せるあるよそれを捨れ
きて猶も他へ嫁し家事みぢれかひ夫ハ
下人などふ嫁して世上よ嘲りうるゝを嘗
色欲強盛よして恥を忘るゆへなり

十五不浄常流　月水毎月のけがらハしきもの

なんぢが身に積りし女根の中に数万乃

婬虫ありて男子の気ハ虫と血かく雑りて

下りて臭穢子より流れ出し善神も

いとひ悪ミて去給ふとなり

此十悪に因て犯しては必ず三悪道に入て永

劫の間無量の苦をうけて解脱する時なし

かくいへり経に女人過患尽劫無説尽　経に十方

國土有女人処則有地獄　経に四百四種病宿食

為根本三途八難苦女人為根本云云

ほとく御経釈の中に於見えたるに女人の過を

とかせたまふ事かぎりもなき事なりされバ

女人とも后の御身のほどの人ハ果報ゆしき様

よき御経ども聴聞のかなはねバ乞食の

男子にもおとれる事なり三世の諸

佛にもみ捨られ十方の浄土へ入らせまじく

此界数多の中にても小国の日本にてさへ高野

金峯比叡山書寫山醍醐富士湯殿等乃

霊地の女人深く入事免されず三途八難

まぬかれざれバ行べきかたなし六道四生にはなれざれ

ば受べき縁もなし。まして人間の生ずる處
ど挂て佛の教に違ふ事もなくかるべし
頼めしきハ女人なり。然るに西方の教主の深く
誓ひ弥陀如来是をあはれみ給ふ故に一切女人悪人
まれざるを見捨給はず。何ぞこの世をうらむ事あらん
かく迄尊き十方衆生と誓ひ給へる第十八の
願は男女ともにもらさせ給はねども殊に女人を立
させ給ひしぞかし。悪欲の念さかんなるにつき
てもつよく後生弥陀如来をたのむべし。嫉妬の心をや
がくさず続くを信西方浄土を願ふべし。心ある
たまはれと念じ口にハつねに念佛
名号を唱ふる人ハ如来本願力に乗じて此世
の後は必ず極楽往生の身を得るぞ。極楽へまゐる
ものとの縁にあやぶみありべきかくもなく往生得楽
しく念佛を恒に事なくたのむべし

女人愛執録巻之下終

柴本唐人之眠言哆ヨリゆモ悪シ

帝[illegible]

相共見[illegible]近

[illegible]

目黒
蟠龍律寺藏板

文化[illegible]

戊[illegible]